

自分らしく学び続ける子供の育成 ～「学習者主体の授業」の実現を目指して～

三島村立三島竹島学園

1 研究のねらい

現代は将来の予測が困難な時代であり、答えが一つではない複雑な問題に対して、自ら考え、解決していく能力が求められている。

本校は、2年生～9年生の計12人が学ぶ極小規模校である。幼少期から島内で生活している児童は2名で他はしおかぜ留学生として県内外から親元を離れて里親と暮らす子供たちである。そのため、これまでの「学び方」が様々であったり、本校としての「学び方」の積み重ねが難しい状況であったりする。

そこで本研究では、本校に合ったよりよい学習方法はどうか、将来島立ちをする子供たちが、学ぶ場が変わっても同じように学び続けていけるようにするために、どんな資質・能力を身に付けさせたいかを考え、「その子らしく学び続けてほしい」という思いを教師間で共有した。

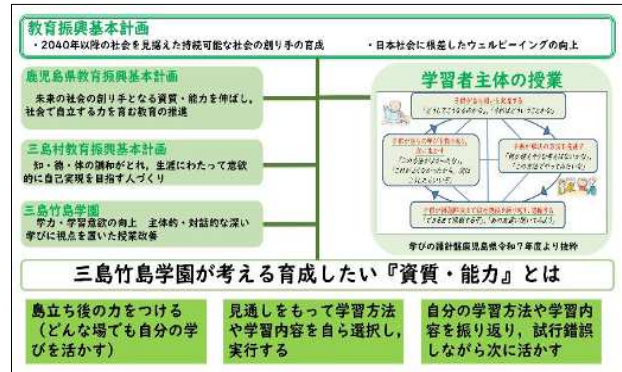


図1 研究のねらい

2 研究の概要

「自分らしく学び続ける子供」について本研究では、興味や関心を基に、自ら問いを立て、試行錯誤することで学びを深め、学びを調整できる子供とした。そのためには「学習者主体の授業」を実現することで必要な資質・能力を育むことができると考える。また、本校における「学習者主体の授業」とは子供が自分自身で学びのサイクルを回すことができるように「単元のデザイン」、「自己選択・自己決定」、「振り返りの視点の明確化」の教師の手立てを明確にする必要がある。これら3つを研究の視点とすることで、「自分らしく学び続ける子供」を育成できると考え本主題を設定した。

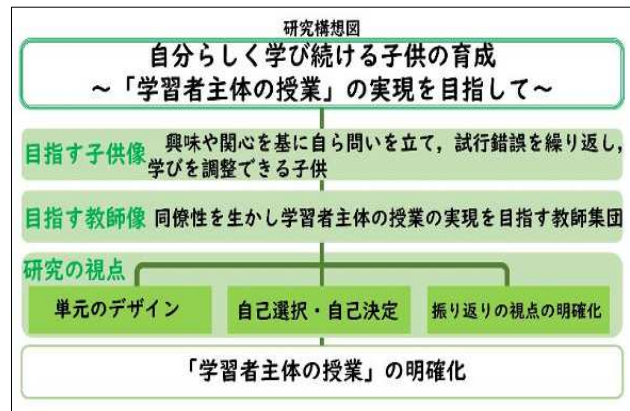


図2 研究構想図

3 研究の内容

本校における「学習者主体の授業」は教師の手立てを3つの視点に絞り、その視点での育みたい子供の姿を図3のように設定した。

教師の手立てを基に、子供たちがこれらの姿を発揮しながら試行錯誤し、サイクルを自ら回すことで「学習者主体の授業」の実現を目指していく。



図3 授業実践のサイクル

4 研究の実際

(1) 単元のデザイン【4年生 算数科「垂直・平行と四角形」の実践例】

教師の手立てとして、数学的活動を引き出す課題の設定と単元の目標を提示した。個に応じ単元を貫く目標を立て、見通しをもてるように学習計画を共有した。まず、図形の仲間分けを通して、何に注目しているかを問い、図形の構成要素を想起させる。そこから単元を貫く問いを立てるようにする。次に教師から示された学習時間と学習内容で教科書等を参考にしながら子供が自分の学習計画を立てるようにした。

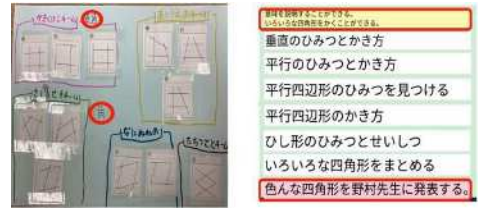


図4 課題の設定と学習計画表

(2) 自己選択・自己決定【8年生 保健体育科「体づくり運動」の実践例】

教師の手立てとして、目標、解決方法、学習形態の自己選択・自己決定の場を設定した。まず、目標設定の場面では、鹿児島県総合教育センターの「体ナビ」を活用し、目標を自己選択・自己決定できるようにした。次に、解決方法を選択できるように体づくり運動に必要な様々な動きを載せたヒントカードを作成し、自分の課題に応じて必要な動きを見付け、回数や時間も自分で設定できるようにした。最後に学習形態は、ペアや個人、グループを選べるようにした。



図5 課題の設定とヒントカード

(3) 振り返りの視点の明確化【7年生 数学科「一次方程式」の実践例】

主体的に学んだことを通して、学習内容の理解の仕方や次の学習にどのように生かすことができるかを考える振り返りは、自分らしく学び続けることに欠かせないものである。そのために、学習の振り返りの視点を明確にした。教師の手立てとして、まず子供に単元の目標と評価規準を示す。そして、学習方法と学習内容の振り返りを促すシート等を各教科用意した。更に、学習内容に関する振り返りは文章で記述させることで、教科の見方・考え方を意識できるようにした。その際、教科の見方・考え方は板書等で視覚的に明確化することで、子供はその視点に着目して書くことができた。

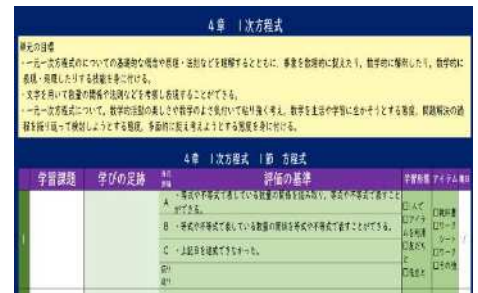


図6 振り返りカードと評価の視点

5 研究のまとめ

(1) 成果

本校の「学習者主体の授業」の在り方を確立することができた。教師は、子供に見通しをもたせ、単元計画の中で自己選択・自己決定をする場のデザインをし、振り返りを次に生かすという意識を教師がもち、それを子供に伝えることができた。このことにより「自分らしく学び続ける子供の育成」に近づいたと考える。

(2) 課題

今回の取組が、今後の非認知能力や、学力向上につながっているのを見極めていく必要がある。また、発達段階に応じた段階的な姿をより詳しく設定することも課題である。

6 今後の取組

9年間を見通し、発達段階に応じた資質・能力を明確にする必要があると考える。また、極小規模校という特性を生かして、認知機能の分析を生かして個のウェルビーイングを育むための非認知能力の育成をすることが、よりよい学力向上につながると考える。